

## 論文の内容の要旨

論文題目：

経世済民の志——二葉亭四迷・内田魯庵・大庭柯公のロシア研究

氏名： 松枝 佳奈

本論は、さまざまな分野にわたるロシア事情の研究に関わった明治・大正期の文学者たちの活動を、比較文学研究の伝統的な分析手法であるエクスプリカション・ド・テキストを用いつつ、当時のロシアをめぐる重大な時局と日本国内の政治・社会状況に沿って考察する比較文学・比較文化史的研究である。今日まで専ら小説家・翻訳家として知られる二葉亭四迷（一八六二／一八六四—一九〇九）と、小説家・文芸評論家・随筆家の内田魯庵（一八六八—一九二九）、大正期にロシア研究者として活躍した新聞記者・評論家・随筆家の大庭柯公（おおぼかこう一八七二—一九二二頃）の三人を中心に取り上げる。そして彼らのロシア事情の研究や議論をめぐる活動や、交流の実態とその意義を考察する。

第I部では、二葉亭四迷のロシア研究とそれをめぐる活動を、彼の総体的な文学観と志士の行為の両立という視点から考察する。第一章では二葉亭関係の先行研究を概観しながら、彼のロシア事情の研究や言論活動を再検討する必要性を確認する。元来、二葉亭はロシアに対する脅威の念を持ち、国内外の政治や軍事、外交で飛躍する志を持っていた。そこで漢学と漢詩文のほか、ロシア語やロシア文学などの教育の感化を受けたことで、双方に共通する文学観、つまり国や人民の現状と将来を憂い、政治や社会の情勢と動向を批判するという文学のあり方を体得したことを明らかにする。

第二章では、明治三十年代の二葉亭が発表した談話記事や評論のほか、日露戦争期の『大阪朝日新聞』記者としての活動に焦点を当てる。二葉亭のジャーナリズムや新聞雑誌での言

論活動への関心が、すでに明治三十年代に兆していたことを提示する。さらに時勢や社会問題を巧みに描写する十九世紀ロシア文学の文学観を理想とし、ロシアの知識人や文学者を自由のために行動する「志士」と位置づけていたことを踏まえ、二葉亭の文学観や思想を考察する。『大阪朝日新聞』における彼の言論活動については、特にロシア事情関係の無署名記事や無署名翻訳記事に注目する。その情報源となったロシア語雑誌との比較から、二葉亭の情報や戦況の分析の正確性や翻訳上の工夫を検討した。

第三章では、日露戦争後に一層精力的となった二葉亭のロシア事情の紹介・解説・批評を取り上げる。ロシア文学に関する談話記事「露西亜文学談」や、日露戦争後の二葉亭の手帳、談話記事「文壇を警醒す」、二葉亭のロシア特派前の「送別会席上の答辞」を中心に分析し、彼が自身の理想と現実の間で苦悩しつつも、日本の文壇や政治、社会に対する批評精神、日露関係に対する貢献への意欲を強めていく過程を見た。そして二葉亭が、最終的に新聞記者や文学者としてロシア事情を研究し論じ、日露双方の社会を広く批判する言論活動を通じて、自身の志士としての理想と文学者としての立場を両立させる方向へ向かったという解釈を提示する。

第Ⅱ部では、内田魯庵と森鷗外のロシア研究を取り上げ、本論では特に内田魯庵のロシア研究に焦点を当てる。両者のロシア事情にかかわる研究や議論の本質は、知識人や社会に対する啓蒙、および思想・言論弾圧に対する抵抗であったと考えられる。第四章では、鷗外と魯庵の二葉亭追悼文をそれぞれ考察し、両者が、対露問題や政治・社会問題への関与を終生目指した二葉亭の志のよき理解者であったことを明らかにした。とりわけ魯庵は二葉亭との親しい交流を通じて、ロシア文学やロシア事情への関心や知識、洞察を深めていたといえる。そして魯庵と同時代のイギリスのロシア研究との関係に注目し、魯庵が二葉亭や大庭をイギリスのロシア研究者との比較から、日本のロシア研究者としてまなざしていたことを示した。特に魯庵がイギリスのロシア研究者ベアリング (Maurice Baring, 1874-1945) とそのロシア研究に高い関心を寄せ、その翻訳紹介を助力したほか、彼と大庭を比較して評価した点を考察する。

第五章では、一九二三 (大正十二) 年に発表された魯庵の随筆「労農政府の承認問題」を中心に、雑誌『太陽』に掲載された彼のロシア関係随筆を取り上げた。終生在野にあり、自由な立場にあった魯庵は、鷗外よりも鮮明に社会に対する啓蒙や批評の意識を露わにし、思

想・言論弾圧に抗う姿勢を明確に示していたといえる。一九一七年に勃発した第二次ロシア革命に対する魯庵の認識の変遷を確認したあと、「労農政府の承認問題」を検討する。魯庵のロシア事情の情報源となった英語文献や日本の新聞記事を特定して分析した。「危険思想」や「過激運動」という語を手がかりに、革命後のソヴィエト政府や日本の社会主義者に対する魯庵の冷静な認識を考察する。そしてこの随筆のなかに、「危険思想」をめぐる日露の政府や社会の相似性を暴露する魯庵の姿と、彼の思想・言論弾圧に対する抵抗の一端を見出した。

第三部では、大庭柯公のロシア研究を検討した。第六章では、大庭柯公の経歴と先行研究を確認したあと、彼の二葉亭追悼文と二葉亭・大庭の関係資料を手がかりに、一九〇二（明治二十五）年前後から二葉亭のロシア特派直前までの大庭と二葉亭のロシア研究をめぐる同志的な交流の実態を明らかにする。大庭が二葉亭の志や理想を引き継ぎ、可能な限り実現に奔走した実行者としての役割を担っていた可能性を提示した。結果として大庭は、対露の志士としても、ロシア研究者や新聞記者としても、二葉亭よりも広く活躍することができたといえる。さらに日露戦争中の大庭がロシア人の捕虜や革命家を通じて社会主義思想に初めて触れ、戦後にロシア人革命家たちを支援し、ウラジオストクで拘禁された経験に注目する。彼の社会主義とは、当時の日本で展開されていたキリスト教社会主義や労働運動とは異なり、人民の自由や権利を圧迫する政治権力や支配者に抵抗し、広く社会の改革を目指すものであった。特に大庭が拘禁中に所持し、読んでいた大庭旧蔵のロシア語聖書を入手し、書き込みや線引きに留意しながら、大庭独自の聖書の解釈の内容を検討した。そして拘禁中の大庭の心境や、自らの主義や思想、その運動に対する献身の決意を読み解いた。つづいて解放後の大庭が入社した『大阪毎日新聞』やその他の雑誌における執筆活動を、彼のロシア関係記事の分析から捉える。大庭が多岐にわたる分野の記事を精力的に記し、ロシア事情に通じた新聞記者や随筆家として活動の場を広げていったことを示した。

第七章では、大正期の大庭のロシア研究に焦点を当てる。『東京朝日新聞』入社した彼は、第一次世界大戦下のロシアに特派され、日本人初のロシア軍従軍記者として活動した。その実態をイギリスのロシア研究者ペアズ（Sir Bernard Pares, 1867-1949）やロシア人従軍記者らの従軍ルポルタージュを比較することで、明らかにする。そして大庭のルポルタージュ「露軍従軍記」が、単なる従軍記ではなく、日本の読者に多岐にわたるロシア事情を紹介解説し、

ロシアに対する理解をもたらした近代日本のロシア研究の萌芽であると解釈した。

帰国後の大庭は、貴重なロシア観察の経験を経た日本を代表するロシア研究者として活躍した。諧謔と機知に満ちた大庭独自のロシアの社会・文化・風俗論「露国感想記」を『東京朝日新聞』に連載し、一九一七年の第二次ロシア革命勃発後には、彼のロシア研究の集大成となる単行本『露西亜に遊びて』を出版した。第四章で扱った内田魯庵の本書に対する書評を再び取り上げ、大庭のロシア研究書に高い評価を下した文章として、その内容を読み解く。それに基づき、『露西亜に遊びて』の内容の解釈を行う。特に大庭が読者のロシア事情に対する関心や深い理解を促す比喩や見立てによる表現の工夫や、第二次ロシア革命後のロシアに対する楽観的な期待や冷静な認識の様相に注目して考察した。

同章の最後に、一九一七（大正六）年以後の大庭のロシア研究活動として、ロシア研究の総合雑誌『露西亜評論』（一九一八—一九二〇）における活動を論じる。大庭が理想的なロシア研究の方法を模索し、その提案や議論を展開していた点や、同誌が組織した団体「露西亜研究会」で中心的な役割を果たしていた点を明らかにした。そして大庭が革命後のソヴィエト政府や、レーニン率いるボリシェヴィキに対する日本の政府および社会の過度な警戒や恐怖心を戒め、正確な情報の入手や、ロシアに対する公平で正しい理解を求めた点を考察する。この分析に基づき、同誌の寄稿者「長醒子」が大庭であったという仮説を提示し、その可能性の実証を試みた。大庭は「長醒子」として、一九一九（大正八）年の言論弾圧事件である森戸事件への反応や抵抗を試みたことと推定できる。ロシア事情を把握するための社会主義思想やクロポトキンの研究の必要性や、言論の自由を訴えたといえよう。そして、第二次ロシア革命前後から大庭が執筆・言論活動の場を新聞から雑誌に移し、自らの存在を巧妙に隠しながら、革命後のロシア事情の研究を展開していたと考えられる。

終章では、二葉亭、魯庵、大庭のロシア研究の特徴や実態を総括し、彼らの政治や社会、文学に対する姿勢や思想、対露認識について考察する。彼らを終生支えたのは、個人の意志に基づく自由の希求や、支配や圧迫に対する反抗心、国家と社会、文明に対する鋭い批評眼であったことが分かる。さらに革命後のロシアへの入国をめぐる晩年の大庭の活動に言及した。最後に、この三人のロシア研究を軸に、同時代にロシア事情に関わった知識人たちの位相を、「志士」、「文学者」、「地域研究者」の三つの分類のなかで検討し、彼らの思想や志向の体系化を試みた。